

誰も教えてくれないお墓の力(ちから) 今野栄一朗 著

第4号で紹介させていただきましたこの小冊子について、今回から1章ずつ内容を抜粋して連載していきます。

第1章 お墓には不思議な力がある

私たち石材業者は、「お客様からお墓の工事を請け負い、お客様の注文通りの墓石を間違いなく作り、お引渡しをする」のが仕事です。一部、墓石のアフターフォローなどの仕事は引き続き残りますが、お客様からのご依頼の仕事はこれで完結します。

しかし、これからお墓を持たれるあなたは違います。

石材業者の仕事が完了した後から、あなたの本当のお墓作りが始まっていくのです。

つい「石材業者側の発する情報が、お墓のすべて」と勘違いをしてしまい、お墓の外面ばかりに気をとられ、肝心の内面を見ることなくお墓を作ってしまうと、お墓の真の意味がよくわからないまま、お墓を使用していくことになります。

すると、お墓参りや供養も儀礼的になってしまい、せっかく新しく作ったお墓も時が経つにつれ、お墓参りや墓石の管理が徐々に負担になってくる。

これではお墓を作っても、あなたや家族に何のメリットもありません。「お金をかけて意味のわからない“負担物、を購入してしまった」ということになってしまいます。

私は、今までは「この仕事では、高品質な墓石製品をお客様に提供することが、自分の使命だ！」と考えてきました。

でもいつしか「人はなぜお墓を作るんだろう？亡くなった方は、本当にお墓を必要としているのだろうか？」と、徐々に疑問に思うようになってきました。そして「お墓とはいったい何だ？」と、お墓の必要性やお墓の持つ意味を深く考えるようになりました。

その結果、お墓には墓石の形や供養儀式など、私たちに見える部分と、お墓の意味を深く掘り下げないと見えない部分がありますが、その見えない所にこそお墓の持つ、不思議な力が隠されていることに気づいたのです。

この冊子の紹介は、この先何項かに渡りますが、新たな気づきが得られ、とても腑におちる話と思います。

どうぞ期待下さい。

※冊子をご希望の方はお気軽にご連絡ください。



新潟市北区神谷内 地藏院庵住様よりご寄稿いただきました。

倶会一處(くえいっしょ)について

浄土真宗の方々のお墓によく見られている文字で南無阿弥陀仏と倶会一處があります。その倶会一處の事について。

今まで私は倶会一處の意味として「人が亡くなると誰もが阿弥陀様の国に行くのです。〇〇家の人達は、皆このお墓に集まるのです。」と話をしていました。以前、お寺様に「阿弥陀経に載っている」とお聞きした様に思います。

最近親鸞聖人と浄土真宗(武蔵野大学教授・山崎龍明監修)という本に出会いました。その中に三つの経典「無量寿経」「観無量寿経」それに「阿弥陀経」の解説文が少し載っていました。阿弥陀経は極楽の有り様を説明している経典の事、その一部にこんな事が書かれていました。

「阿弥陀経」はこの国に生まれた人々はもはや退くことなく、一生補処(いっしょうぶしょ)の菩薩(ぼさつ)(次には自身が仏になる段階の者)が多いのだという。そして釈尊は弟子の舍利弗(しゃりほつ)へ「ですから舍利弗よ、その国に生まれたいと願いなさい。そうすれば倶会一處、すなわち極楽に善き人々と同じ所にいることができます。」と告げる。お墓にはよく「倶会一處」と刻まれているのは、この説法による。紹介します。私も初めて教わりました。

【齋藤 繁樹】



石屋のイロハ(4)

今回は原石から石を形に仕上げる事、中でも手加工の大切さを話します。採石場で採掘された原石をノミと鍬を用いて色々な形に出来る者を石工と呼びます。原石から仕上げの最後までの手順を写真で紹介します。



加工されていない原石の状態。ここからどの様な加工をするのか決めて寸法を出し、墨掛けをする。この状態も「割肌仕上げ」と言う仕上げで使用される事もある。

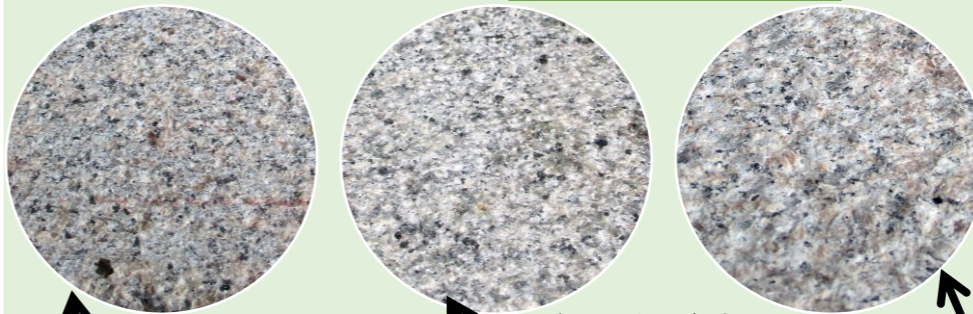


仕上げたい高さの少し上の場所までノミで縦目の溝を作る。



荒切りした溝の底に合わせて山になっている部分をノミで荒くむしる。

仕上げ目の拡大写真



小叩き仕上げは手仕上げの中でも最上級の仕上げとされる。

刃が8×8で仕上げたものは「8枚ビシャン仕上げ」刃が10×10仕上げたものは「100枚ビシャン仕上げ」と呼ばれる。



荒むしりのできたコブをノミでさらに細かくむしる。「むしり仕上げ」



ビシャン仕上げの面を「片刃・両刃」と言う道具で一方に細かく叩き、叩き目を揃えて仕上げる。「小叩き仕上げ」



さらに細かいビシャン(刃の数が8×8や10×10の物)で叩き、平らにし、目を揃える。「ビシャン仕上げ」



コブの付いた鍬(ビシャン)で叩き、表面を平らに整える。荒ビシャンは刃が4×4や5×5の物。「荒ビシャン仕上げ」

この様な工程を現代では一気に切断機や切削機で仕上げてしまう事が多くなっています。しかし、石本来の独特の味を生み出す事が出来るのは、原石を必要に応じて機械で寸法切りし、そこに石工の技で手加工を施す事、それが一番だと思えます。その為に何年もかけ石の仕上げを教わり、日々技術を磨いていっております。※この仕上げ見本を実際にご覧になられたい方はどうぞ豊栄本店までご来店下さい。【齋藤 繁樹】